

現場における研究について



日名子太郎

最近では、現場における研究が従来に比して、きわめて盛んにおこなわれるようになってきている傾向が認められるが、研究の動機、あるいは問題の設定、さらに研究の方法などの点で、必ずしも未だじゅうぶんとはいえない状況である。教育における研究は、大別して研究室などでおこなわれるアカデミックなもの、現場においておこなわれる実践的な立場に立つものの二種類が考えられる。従来、世間一般の人々はもちろんのこと、現場の教師自身も、現場における研究の価値を過少評価し、研究とは、とかく、外国文献の紹介を中心としたあるいは理論的な、基礎的な、研究室のものなのではないかというふうにかんがえてきたと思う。私は、決して、ここで、この二者の価値判断をしようとするものではない。ただ、現場における研究というものが、研究室におけ

るそれと同じ程度に重要なものであり、むしろこの二つの面における研究が車の両輪となって進むべきであることを強調したのである。しかし、そのためには、今日、現場、なかんずく、幼児教育の現場における研究について、その障害、欠陥、さらにはどのような点に配慮すべきかを検討してみることが大切であると考へ、以下、それらの点について述べる次第である。

一、現場における研究の困難な点は何か

現場における研究者は、すなわち保育者である。保育者は、特別の場合を除いて、保育においては専門家であるが、研究技術の面では、不じゅうぶんな場合が多い。しかし、保育者は、たえず現実的な問題に囲まれており、解決すべき具体的な問題が些細な

ものから膨大なものまで無数に山積した中に生活しているの、常に切実な研究の動機を有しているものである。そして、それらを解決しようと焦りながら研究者としての教養が欠けていること、時間、経費が不足していることなどが原因して、大半は手をつけずに残したり、時たま拾い上げたとしても、研究としては方法その他に欠陥が多いため、問題そのものは重要な価値を持っていない。これに反して、研究室におけるものは、多くの場合研究者の主観的な興味が原動力となっており、現場の切実な問題と関連を持つ場合もあるが、たいていは、現場人から見ると甚だ理論的な価値しか持たぬように見えるものが少なくない。換言すれば、研究の動機において、研究室も、現場も共に主観的な動機をもっているのであるが、研究室のそれは、興味、動機となり、現場のそれは、保育者の心配（なやみ）が動機となっているといえよう。このような現場における研究の動機は、必然的に、研究者である保育者を、一歩退いて冷静に考えるという態度を忘れさせ、きわめて局部的な研究ないし報告に終らせてしまう危険性を蔵しているのである。さらに、保育者である研究者が陥り易い欠点としては、研究の計画を、常に日常保育との関連の上に立って考えなければならぬ関係上、途中において生ずる不慮の障害が極めて多いことや、また時間的制約をうけることが多いため、大切な機会

を失うといったことが少なくないので、永続性を欠くことになりがちである。

以上述べたところで明きらかにされたように、現場における研究は、すでにその動機において研究室のそれと異なっているのであるが、問題の設定においても考えなければならない点が少ない。自然科学の分野においては、研究は、すでに明きらかにされている知識（証明されている知識）の間隙を埋めるためになされるものであるが、教育（保育）の分野においては、その性質上、必ずしも未開拓な分野のみの研究が大切なわけではなく、むしろ、「すべての教師の実践が、より良いものになること」を必要条件として含むものでなければならぬということである。この点、現場の研究者が、前記の現場の研究のあり方を忘れて、研究のための研究に走ることが警戒しなければならぬ。

さて、たとえ、正しい研究の動機をもち、問題の設定もおこなわれたとしても、保育の現場には、このような研究を妨げる一つの傾向が存在するのである。それは、経験主義とでも呼ぶべきであろう。現場の研究は、教師の実践を高めるようなものでなければならぬのであるが、経験主義は、比較的せいまい範囲におけるそれまでの自己の経験を至上のものとする故、教師が実践を高めようとする態度とは相反するものである。過去、現在を通じて保育界には、名人芸的な保育技術を身につけた教師が多く存在する

のであるが、これらの人々は、自己の子どもを取り扱う態度をそれまでの数多い体験を通して名人芸的なところにまで磨きあげたのであるから確かに敬服に値するといえよう。しかし、その反面、それが、単にそれらの人々、各個人にとどまっていて、少しも一般的な拡がり、あるいは原理化されたもの、体系化されたものになっていないし、また体系化しようという努力（すなわち研究）を怠った点で許されぬものがある。私は、今日の保育界で、現場における実践的研究を妨げている最大の癌は、実に、このような名人芸なのであり、経験至上主義であると思う。長い歴史と伝統には、確かに美しい、底光りのするものがあるけれども、そこには同時に停滞と沈澱がみられることを忘れてはならない。更にこのような経験主義と結びついて、現場における研究を妨げているものは、経営との関係であろう。現場における研究が、くりかえし述べたごとく教師の実践を高めるような要素を含むことを必要条件としている限りにおいては、一見、経営との間には、何らの摩擦が起りそうもないように見える。しかし、経営というものは、常に安定を求めるが故に、伝統を重んじ、また経験を尊重する場合が少なくない。このような場合においては、経営は、研究の障害となつてその前に現われて来るのである。経営を安定させておく為には、余り急速な変化を好まず、伝統の流れに流されていくことを選ぶものである。折角のよい研究も、「うちでは昔か

ら、こうしております」ということばの下に葬り去られたことが何と多いかを考えてみるとよい。しかし、この反面、このような対立するものをうまく調和し、苦しみながら今日まで研究を続けて来た私立園の現場人には賞讃を惜しまない。

二、現場における研究を促進させるには……

前述のような困難な点を有する現場の研究ではあるが、これを打開して、その研究を促進させていく為には、一体どのような配慮が必要なのであろうか。

現場における研究は、必ず教師の実践を高めるのに役立つものでなければならぬといったが、そのためには、まず、すべての保育者のひとりひとりが、研究者になる、いや研究者であると考えなければならぬのである。そして研究者は、どうしても創造的な能力を欠くことができない。したがって研究者である保育者も、創造的能力、創造的研究精神を持っていなければならないのである。この点について宗像誠也氏は、*「教育研究においては少数の尖端的な研究者のみが創造的能力を持っていなければならない、一般の教師もまた多分にそれを必要とするのではなからうか。すなわち、教育においては、数十万の教師の教育実践がよりよいものになることが必要なので、そのためには、結局はひとりひとりの教師の研究が必要なのである。教師が識見を高め、また*

教師がいれば教育技術を身につけることが必要なのである。これもひとりひとりの教師にとっては研究であるといっている」と述べている。

さて、このような考え方に立脚したとき、大切なのは、実は既得の知識ではなく、現実の子どもを観察し、把握し、理解し、考察できる創造的能力なのである。そのためには、どうしても、教育研究法ないし^{*}保育研究法が、教師にとって大切になってくるのである。

なお、今一つ大切なことは、保育に関する研究が、もっと蓄積されなければならないということである。かつて、^{*}ある保育の座談会でも、「保育界の七不思議」の一つとして、「なぜ研究が蓄積されないのか」ということが取り上げられたことがあるが、このことは、保育者が、すでに明らかにされている知識を習得せず、常に「無」の状態から出発し、経験によって、個人的な蓄積をおこない、それが、次にうけつがれず、たえず悪循環をおこなっていることによると考えてよいであろう。

この悪循環を断ち切るためには、一つには、保育者を養成する機関の問題があり、いま一つは、現職教育の問題があると思う。

ここでは、養成機関のことは別の機会にゆずるとして、現職教育の機会において、過去の研究業績の蓄積（資料蒐集）がなされなければならぬことを力説したい。幸い、私立幼稚園においては、

日本全国にわたり、約四千の施設を含む日本私立幼稚園連合会（日私幼）が、全国的な組織の下に、各ブロック研究部が、日私幼研究委員会と連けいして、活発な研究活動を開始しているので、今後、共同研究、あるいは、全国的な研究業績の蒐集、現職教員の指導といった面で、大きな力を発揮すると思われる。

* * *

現場における研究は、それ自体、きわめて重要な価値をもつものなのであり、研究機関における研究と相並ぶものでなければならぬ。現場の教師の中には、研究といえば、一部の学者でしか出来ないもののように錯覚し、またその種の結果や指導のみを重視する傾向があったけれども、今後は、それらに対抗するといった意味ではなく、むしろ現場における研究の重要性を認識して、協力するという自信をもった態度で進んでほしいと思う。

* 1 「教育研究法」宗像誠也著（第三四頁）

新評論社刊

* 2 「保育研究法」辰見・角尾・日名子共著

学芸図書KJ刊

「幼児教育研究」辰見・日名子共著

（幼児教育体系第一巻・第三分冊）国土社刊

* 3 「幼児と保育」第三巻・第十七号（森脇・秋田・日名子 第一八頁）小学館刊

（東京・私立栄光幼稚園長 玉川大学講師）